

新生した人

〈井戸の中の回心^{かいしん}〉

次にお話することは、私が二十代後半の頃、既に40年近くも前に、明け方のラジオ番組で聴いたことであります。生命というものについて、また、見えざる存在の配慮というものについて深く考えさせられたお話で、その後折々に、人々にも伝えてきました。細かいところや言葉など、本人のお話された通りではないかもしれませんが、その時私が把握した内容の核心を伝えるべく、書き記してみようと思います。もはや、正しく聴き覚えておいでの方がありましたら、ましてや万が一、ご本人がご

存命で、この文章を目にするようなことがありましたら、どうぞ、ご容赦下さい。お話された体験者の方のお名前を記憶しておりませんので、仮に高橋さんと致します。

会社勤めをしていた高橋さんの何よりの楽しみは、日曜日や休日に、山に狩猟に出かけることでありました。ある冬の日、冬と言っても、その地方は雪の少ないところのようでしたが、その日も高橋さんは、いつもどおりに猟銃と奥さんの手作り弁当やお茶を持って、嬉々として出かけたのであります。山に向かって、どこか知らない、枯れた茅に覆われた冬の原っぱを通って行ったとき

翻訳・著述家(ヴァイガン)

加藤明

のことです。「あっ！」と声を上げた次の瞬間には、暗い穴の底に落ち込んでしまっていました。幸い穴の底には枯れ葉のようなものが堆積していたこともあり、軽度の打ち身やかすり傷程度で、大怪我には至りませんでした。

どうも、打ち捨てられてあった、涸れ井戸に落ちたらしいのです。きっと、元々は注意を促す立て札のようなものもあつたのでしようが、いつの間にか忘れ去られて、危ないままに放置されていたものと思われます。時代劇に出てくるような浅井戸のようですが、それでも、深さ数メートル程はあるでしょうか、下からは、頭上にポツカリと天上窓のようなものが見えるだけです。高橋さんは、助けを求めて、声を限りに叫び続けましたが、内部に虚しく反響するだけで、何時間経つても、助けに来る人の気配はありませんでした。井戸の壁をよじ登ろうと、あれやこれや試してもみましたが、これも虚しい試みのようでした。

うちに、やがてその日も暮れました。

3日目になると空腹感と脱力感が増してきて、声を上げるのさえ、たいへんな努力が要りました。それでも、一縷の望みを託して、時々、声を上げ続けました。が、どんなに耳を澄ませても、応える声は聞こえません。自分の声の反響が鎮まると、シーンとした静寂と共に、尚いつそう、絶望感と孤独感が押し寄せてくるのでした。空腹と疲労で憔悴しきつたまま、その日も虚しく暮れてゆきました。

やがて、うつらうつらした状態の中で、4日目の朝を迎えましたが、もう、声を出す体力も気力もありませんでした。半ば朦朧とした中で、様々な思いや映像が、脳裏を掠めてゆきました。「自分はここで死ぬしかないのか」と思いました。妻や子供たちの顔が浮かんでくると、「今どうしているだろう、どれほど心配していることだろう」と思いました。と、その時です、彼の心に、自分

そうこうするうちに、時は過ぎゆき、宵闇がせまってきました。叫び疲れ、空腹を感じた高橋さんは、ともかくも腹枵えをしようとして、かすかに残る薄明かりの中で、弁当を開きました。この度は何時になく、一箸一箸、口に運ぶ度に、妻の愛情がひしひしと感じられて、涙がこみ上げてくるのでありました。食事を終えると、それまでの疲労が一気に押し寄せてきて、深い眠りに落ちてゆきました。が、これまた幸いなことに、そこには打ちつける風もなく、防寒着を着込んでいた上に、小さな毛布も携えていましたから、比較的暖かく眠ることができたのです。

目を覚ました時には翌日になっていました。まだ暗いうちから、高橋さんは焦る心で、助けを呼び求めましたが、やはりなんの反応もありません。また、壁をよじ登るために、あれやこれやと工夫を凝らしましたが、どれもこれも、うまくいきそうにありませんでした。刻一刻と、時は虚しく過ぎゆくばかり。極度の疲労と絶望感の

がこれまで仕留めてきた動物たちのことが思い浮かんであります。「俺は多くの動物たちを撃ち殺してきたが、あの動物たちにも家族があつたのだ。出て行ったきり帰らぬ夫を、或いは妻を、子供たちを、家族はどんなにか心配しつづけていたことだろう。そんなことは毫も考えず、その肉を食ったり売ったりするために、ただ自分の楽しみのために、殺生を繰り返してきたのだから、これが因果というものだ。なんと罪深いことをしてきたことか！」こう思うと、悔悟の涙が止めどもなく溢れ出てくるのでした。

しばらくして、涙も涸れ果てたかに思えた時、足元のほうで、ガサゴソと枯れ葉の擦れ合う音がします。見ると、枯れ葉の間を、ゴキブリが右往左往しているのではありません。いつもなら、ゴキブリなど、と思い、直ぐにも叩き殺していた高橋さんでしたが、この時は違いました。「ああ、自分は一人ではない、ここに一生懸命に生きている仲間がいる」と思えたのであります。今ここに、

同時に、自分と一緒に、息している生き物のいることが、わけもなく嬉しく、ありがたく思われたのです。すると、なぜか救われた気がすると同時に、この小さな生命の同胞に対する感謝と愛憐の情が、またしても涙を伴って、限りなく湧き上がってくるのでした。こうして、4日目は、涙のうちに過ぎてゆきました。

5日目、6日目も、何事も無く打ち過ぎて、7日目となりました。高橋さんは、わずかに残っていたお茶だけを飢えを凌いでいました。3日目の空腹感の絶頂を通り越したせいなのか、激しい空腹感に責め苛まれる感じはなくなっていました。日一日と、体力も気力も衰えてゆくようでした。

「もうここで終わりがかもしれない、為す術もなく死を待つばかりの心境にあつて、彼が返す返すも心配に思つたのは、妻のことでありました。天涯孤独の身の上であつたら、心残りなく死ぬるかも知れない、と思ひました。

く気配は感じられませんが。一時間、二時間と過ぎてても、やはり同じでありました。「やつぱりだめだったか」と思ひながら、疲労困憊した高橋さんが、うとうとしていた時です、上の方から「おーい、誰かいるかー?」という声が聞こえたのです。夢現つの高橋さんは、夢かと思いつつも、上を見上げました。すると確かに、チラチラと動くものがあり、またしても声が聞こえたのであります、「おーい、誰かいるかー?」。夢ではない、正気に返つた高橋さんは、必死になつて「ここにいて、ここにいて」と返答しました。「わかつた。助けを呼んでくるから、少し待つてろよ」と言うなり、声の主は立ち去りました。その時の高橋さんの安堵や感謝の気持ちは、如何ばかりであつたことか！察するに余り有ります。

やがて助けが到着し、高橋さんは無事に救出され、病院に搬送されました。聞けば、高橋さんを最初に発見した男性は、散歩の途中で井戸のある方へやつて来たのだそうですが、その時に限つて急に、いつもの散歩コース

けれども、日夜あちこちと、必死になつて私を探し回っているであろう妻、そして間もなく一人残されることになるかもしれない妻のことを思うと、心配やら残念やらの感情が押し寄せてきて、いたたまれない気持ちになるのでした。「ああ、何としてでも、生きて帰つて、安心させてやりたい」と、腹の底から強く思うと、いつの間にか、高橋さんの口から、嗚咽と共に、今まで一度もしたことのない、祈りの言葉が漏れ出ていました。「ああ神さま、どうかお助け下さい。妻を安心させられるように、助けて下さい。生きて帰れたなら、もう二度と殺生はしません」。それは、涙ながらの、全身全霊での祈りであり誓いでありました。

祈り終わった高橋さんは、渾身の力を振り絞つて声を上げました。「おーい、誰かいないかー? 助けてくれー」。ありつたけの大声で、二度三度と助けを呼び求めました。井戸の中の反響が静まるのを待つて、耳を澄ませました。五分、十分、三十分と経つても、人の近づ

とは違う方向へ行つてみたくなつた、ということでありました。井戸は一般道や人家からかなり離れたところにあつて、辺りは枯れ草とはいえ藪だったわけですから、なぜそんなところに足が向いたのか、本人もよくわからない、と言つていたそうです。

その後、元氣になつて退院した高橋さんが、先ず最初にしたことは、狩猟道具の処分でありました。肉食もやめました。ゴキブリやハエを殺すことさえ、しなくなりました。井戸の中の誓いを、本当に実行するようになったのであります。そのうちに、生命の尊さということを、他の人々にも伝えたい、と思うようになりました。やがてその機会がおとずれ、小学校などを回つて、子供たちに自身の体験談を話すようになりました。こうした話を伝え聞いて、ラジオ番組でも取り上げるようになったのでしようが、幸いなことに、私もこの貴重な体験談を聞くことができ、今でもこうして伝えている、というわけです。

〈人生の目的と見えざる存在の教導〉

この高橋さんの回心体験とも言える祈りと救助の物語を、私自身は、狩猟したこともなければ、井戸に落ちた体験もありませんでしたが、我が事のように感動に打ち震えつつ、聞いていました。Life (ライフ・生命・生存・人生・生活) というものについて、万人にとって極めて大切な教訓が含まれている、と感じられたからであります。生命とは何か、人生とは何か、についての、また、見えざる存在の遠謀深慮と教導についての、まだ二十代であった私自身の漠然とした推察を、確信へと変えた、話の一つでもあったのです。

この世で最も尊いものは「生命」であります。そもそも生命がなければ、人生もないのであります。その人生で何より大切なことは、生命をどれだけ尊び愛しているか、ということであって、他のすべての事柄は、すなわち財産や地位などは、皆この一事を遂行するために役立つ

漏れることはありません。

高橋さんの体験した、「井戸に落ちて、一週間というもの飢えと孤独の状態に置かれた後、九死に一生を得る」という一連の出来事は、彼をして、「犯してきた過ちに気づかせ、その罪を清算させる」ための一つの方途として、見えざる存在たちの手によって用意されたものであった、と思われまます。高橋さんは、神の生命である生きとし生けるものを蔑ろにして弄ぶという、その罪の重さに気づくチャンスを与えられたのであります。自分の生存にかかわるこの極限の場において、彼は初めて、動物たちの生命も、人間の生命同様、等しく尊いものである、ということに気づきました。否、気づくべく導かれたのであります。見えざる存在たちは、高橋さんが真に自分のしてきたことの非を悟り改心したことを見て取った時、彼を救うべく、散歩者の心に働きかけました。

彼はきつと、それまで無知ゆえに狩猟という悍ましい

ててこそ、意味を成すのであります。人生の目的は、神なる生命の尊さに目覚め、動物も含む自他の生命を愛すること、生命を活かすこと、です。人間ばかりではなく、生き物すべての生命表現が、自由に存分に行われるように、手助けすることなのであります。実は、私たち自身にしても常に、より高く進歩した見えざる存在たちによって、そうした人生の真の目的に目覚め遂行するべく、導かれ助けられているのであります。

この世に偶然はない、と言いますが、高橋さんの体験も、因果応報の法則・カルマの法則に則って起こった出来事だったにちがいません。善因善果、悪因悪果であり、人は「時いたとおりに刈り取る」のです。しかしながら、ありがたいことには、神は絶対無限の愛であり、過ちを犯したからとて、直ちに、永遠の罪に定められ、更生の道を絶たれたりするものではありません。人々を進歩向上の道へ進めようとして、絶えず見守り導いている、見えざる存在たちの愛の配慮から、誰一人として道楽を続けてきた他は、至ってまじめな人であったのでしよう。上述の言葉からもわかるように、家族思いの愛妻家であり、誠実に仕事を果たしてきた、一般的な見地から見れば、善良な市民であった、と思えます。ですから当然、善果を結ぶ多くの善因もあつたはずですが、一見不幸と見える窮地に追い込まれましたが、腹の底から改心し、結局は救われたのも、悪因に優る、その善いカルマあつたことだったのです。

どんな人にも、よりよい状態に移行するチャンスが与えられています。大抵は、この場合のように、一見不幸と見える苦しい状況となって訪れてきますが、その時、自分自身の良心の声に、或いは見えざる存在たちの囁きに耳を傾け、改心し、真摯に実行するならば、多くの悪因も相殺されて、よりよい人生に変化するのであります。まさに、「人の苦境は神の好機である (Man's extremity is God's opportunity)」のです。ただ往々にして、苦境の中で聞いた内なる声に、高橋さんのように直ちに従え

ばよいものを、「喉元過ぎれば熱さ忘れる」で、苦境を脱すると、そこに用意された見えざる存在たちの配慮など一顧だにすることなく、もとの悪習慣に戻ってしまうことが多いのではないだろうか。苦しい病気にかかって、動物食が原因だという内外からの示唆があったとしても、小康状態になると、もとの食習慣に戻ってしまうなど、そのよい例であります。高橋さんは、劇的な救助の後も、過ちを文ることなく、極限状況での切実な誓いを実行に移したことで、その罪は確かに償われ、人生の目的に適った、真に価値ある人生を歩み得るようになったものと思われれます。「人生の目的に適った」と言ったのは、「人生とは、生活とは、Lifeとは、生命を愛し活かすこと」に他ならず、高橋さんはその通りに実行したからであります。

高橋さんのように実際の井戸に落ちないとしても、誰でも一度くらいは、井戸のように暗く湿っぽい、にっちなもさつちも行かない状況に陥ることがあるものです。そ

助け手が現れるではありません。

〈無知蒙昧な人の死後と来世の境涯〉

さらに、この高橋さんの体験で興味深いことは、彼が苦悶の一週間を過ごした井戸の底の境遇というものが、無知蒙昧なままに人生を送った人々が死後に体験する状況と、類似している点であります。私が知る限りの、定評のある信憑性の高い霊界通信や、私自身の心霊体験によれば、生命の何たるかを弁えず、相手が人が動物かを問わず、生命というものを軽視して独善的に生きた、いわゆる「無明」の人は、死後、花一つ無い無味乾燥で殺伐とした、血生臭い悪臭のする、暗く寒い孤独な境涯に赴き、心に慈悲慈愛の思いが兆すまで、そうした境遇で過ごすことを余儀なくされるのであります。明らかに、この世での生命の尊重度と、死後の境遇の美醜・匂い・明度・温度には、相関関係がある、わけです。

うした苦境という井戸に落ちた時、早く助かりたいと焦って、無闇矢鱈と外に向かって働き掛けても、当初の高橋さんがそうであったように、心身共に疲労困憊するばかりで、むしろ絶望感のほうが大きくなるものです。苦境はどんな形で現れてこようと、結局のところ、それが嘔いていることは同じです。「もつと、慈悲深くあれ、

讚歎感謝の生活であれ」ということなのです。「自分はこれまで、食物も含めて、生きとし生けるものに讚歎感謝する慈悲深い生き方をしてきたかどうか」、それを反省してみなくてはなりません。もし仮に、動物食をしているとしたら、食欲という利己的な欲のために、何の罪もない無垢な動物たちを拘束し、搾取し、殺害する行為に加担しているとしたら、他の言動に問題がないとしても、その食事の度毎に、猫をしていることと何ら変わりがないのであります。苦境から脱せんと願うなら、高橋さん同様に、先ずこの無慈悲な行為を深く反省し、食卓から殺生食・搾取食を一掃する決意をすることです。そうしたなら、これまた高橋さん同様に、必ずや、思わぬ

これは何も、死後の境遇に限ったことではありません。実は、ある人の生命の尊重度とその境遇は、顕幽両界に共通して、相関しているのであります。一般に、生きとし生けるものを尊び生きている人の境遇や心身は、明るく軽く爽やかで温もりや芳香に満ち、一方、生きとし生けるものを損ない苦しめて生きている人の境遇や心身は、暗く重く陰湿で冷ややかで悪臭がするのであります。これは、その人の放つ波動やその人を彩るオーラとして、理屈なしに実感されるものであり、感受者の心身が浄化されている度合いに応じて、より明確に感知されるものです。

なぜ、そうなのか？ 英単語を用いてこれを説明すると、わかりやすいと思います。聖書には「主なる神」とか「主よ」と言うように、「主」という言葉が度々出てきますが、この場合の「神・主」は、英語では Lord であります。また、神とは何か、としようと、神 (Lord) は、生命 (Life)・愛 (Love)・光 (Light)・理法 (真理・法

則 Law) であり、この「生命」「愛」「光」「理法」は、神の別称なのであります。従って、五つの L で始まる英単語、「神」「生命」「愛」「光」「理法」のどの一つを欠いても、残りの四つを同時に欠くことになってしまいます。たとえば、生命を軽んじている者は、神を軽んじているのであり、愛にも光にも乏しく、理法から逸脱している、ということなのです。ちなみに、L の「エル」という発音は、ヘブライ語では神格を表す言葉であり、「エル・シャダイ・全能の神」であるとか、「ミカ・エル・神に似た者」のように使われています。

Life (生命) の動詞型は live (リヴ・生きる生活する) でありますが、この単語を逆から、後ろから読むと、eliv (エヴィル・悪悪い) となります。まさしく「悪」とは、生きようとするに、発現し表現しようとする生命に、逆行することに他なりません。生命とは、その形態がどうであろうと、神が自らを顕現し表現しようとする姿なのでありますから、その生命の自由な発現・展開

れて食べ頃になると、自ら芳香を放つと同時に、赤や黄の目立った色に変色して、自らの所在をアピールする果物のような植物とを、同一視することはできないのであります。だいたい、果物を食べたからといって、木は死なないのです。ふと思いついたので付言しましたが、話が逸れてしまいますので、動物と植物の違いについては、また別の機会に譲ることと致します。()

故に、相手が誰であれ何であれ、意図的に殺生や搾取をして生きた人はもとより、殺生や搾取に無頓着に生きた人でも、五つの L に乏しい人の境涯は、特に心境がそのまま直ぐに境遇となって現れる幽界においては、その心境そのままに、その生命軽視の度合いに応じて、生氣(生命)なく、光なく、愛という温もりもない、臭気漂う、寂しい境遇が、現実化するわけであります。そして、やがて転生したにしろ、種々の辛酸に喘ぐ苦しい境涯に生まれ合わせるようになるでしょう。人は、いつかどこかで、必ずや「自ら蒔いたものを刈り取る」ことに

を阻止したり妨害したりする殺生や搾取によって、その力に反逆することは、神に反逆していることに他ならず、神の生命・愛・光に乏しくなり、神の理法から外れて混乱するようになることは、必定なのであります。先にも述べたように、そもそも、「live: 生きる生活する」とは、単に生き長らえる、ということではありません。文字どおり、「生命を活かす」ことが生活することなのであり、殺生食や搾取食を重ねて生命を活かさない毎日をおくっているなら、真の意味で、生活している、とは言えないのであって、むしろ、「逆生活」なる悪を行っている、ということになるのであります。

(こんなことを言うと、「植物だって生きているのだから、植物食だって、動物食同様、殺生食であり搾取食ではないか」と反論する人があります。もちろん植物も生きているからこそ成長し変化するのでありますが、捕まえようとすれば逃げ、傷つければ悲鳴を上げたり、声を上げずとも、のたうち回ったりする動物と、例えば、熟なるからであります。高橋さんは、それまでの生き方であれば間違いなく赴くことになったであろう自分の死後の境涯を、井戸に落ちたことよって、生きながらにして予め知る機会を与えられました。彼がそのことを意識したかどうか、また、その後の彼が死後や来世のことまで意識して生きたかどうかはわかりませんが、確実に言えることは、生きとし生けるものの生命を尊重し愛するようになった彼は、この世でもあの世でも、もう二度と、このような地獄体験をすることは無い、ということであります。

この文章を読み、熟読し、高橋さん同様、愛事(まなごと)の「生活」を始められる方々の上に、神の豊かな祝福のあらんことを、お祈り申し上げます。

完